

平成30年度農作物病害虫発生予察情報

発生予報 第6号（9月予報）

発表日：平成30年8月29日

岩手県病害虫防除所

I 情報の要点

1 大豆

◎**吸実性カメムシ類の発生は並の予報**ですが、発生の見られる圃場では有機リン剤によりマメシクイガとの同時防除を実施しましょう。

2 りんご

◎**褐斑病が多くの予報**です。本病の発生が確認された場合は、速やかにトップジンM水和剤又はベンレート水和剤を特別散布しましょう。また、近年未発生の園地でも、9月下旬までは園地内をよく観察し、早期発見に努めましょう。（詳細は、平成30年8月8日発表の注意報第2号を参照のこと）

◎**黒星病が多（平年少発生）の予報**です。他病害との同時防除を兼ねて、本病に効果のある予防剤を定期的に散布しましょう。また、苗木など未結果樹についても薬剤防除を徹底しましょう。

◎**ハダニ類がやや多の予報**です。園地をよく観察し、発生が多い場合には速やかに防除を実施しましょう。

3 野菜・花き

◎**きゅうりでは、炭疽病と褐斑病がやや多の予報**です。発病を確認した場合は、発病葉を摘み取り処分するとともに、効果がある薬剤による防除を実施しましょう。

◎**ねぎでは、ネギコガがやや多の予報**です。防除適期を迎えていますので、速やかに防除を実施しましょう。

また、**ネギハモグリバエがやや多の予報**です。発生が見られる圃場では、効果の高い薬剤による防除を実施しましょう。

◎**りんどうでは、花腐菌核病がやや多の予報**です。降雨が続く場合には散布間隔を短くし、予防散布に努めましょう。

II 農薬の安全・適正使用

- 1 農薬の使用にあたっては、他作物や周辺環境に影響が及ばないように十分配慮し、対策を講じましょう。特に、養蜂活動が行われている地域で水稻、大豆、りんごなどの作物に一斉に農薬を散布する場合は、養蜂家等への防除計画の事前周知に努めるなど、ミツバチへの危害防止に努めましょう。

【利用上の注意】

本資料に掲載した農薬は、平成30年8月8日現在の農薬登録情報に基づいて作成しています。

・農薬は、使用前に必ずラベルを確認し、使用者が責任を持って使用しましょう。

・農薬使用の際には、(1)使用基準の遵守(2)飛散防止(3)防除実績の記帳を徹底しましょう。

【情報のお問い合わせは病害虫防除所まで】 TEL 0197(68)4427 FAX 0197(68)4316

☆この情報は、いわてアグリベンチャーネットでもご覧いただけます。

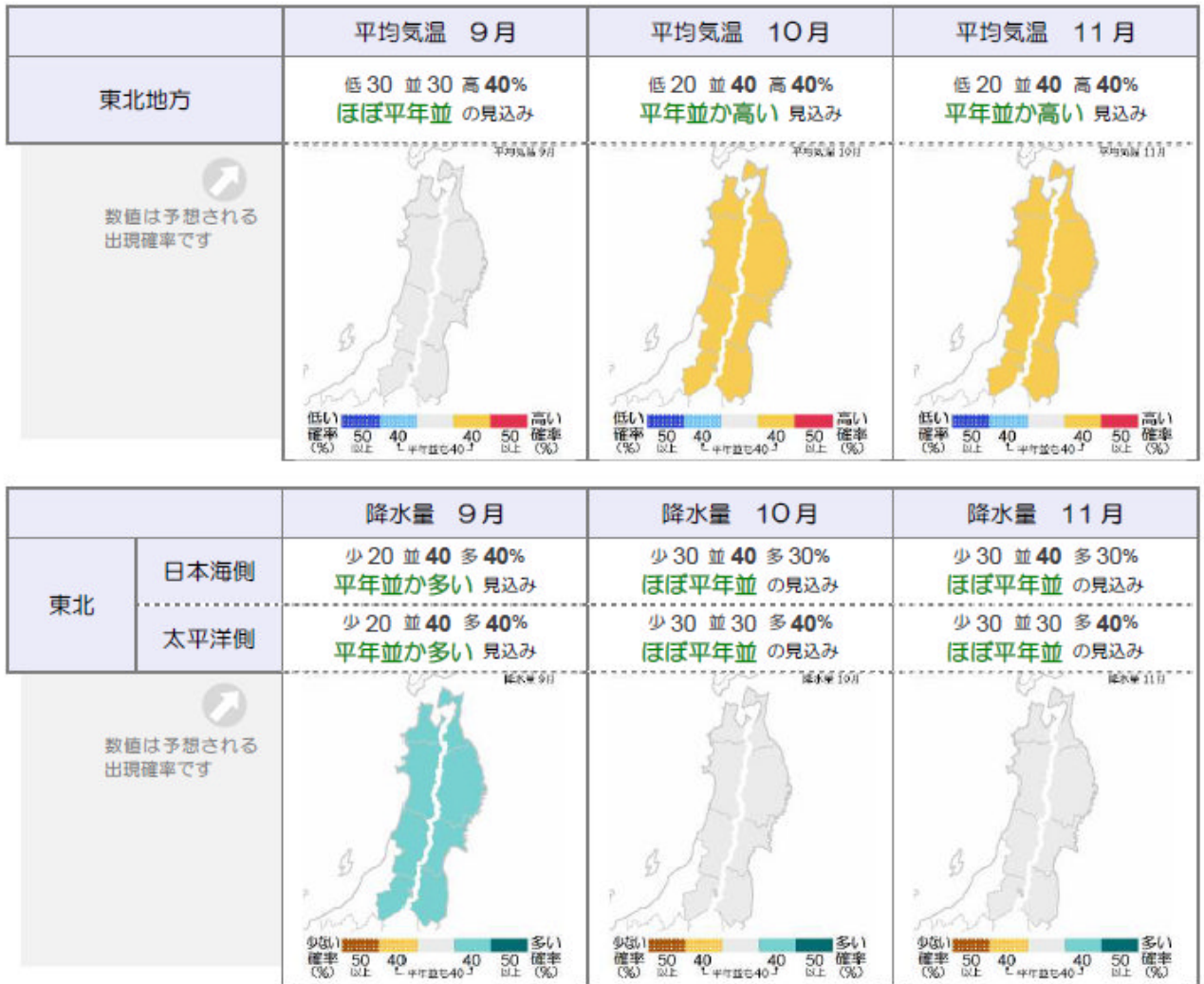
アドレス <http://i-agri.net/Index>

Ⅲ 3ヶ月予報（9月～11月、仙台管区气象台、8月24日発表）

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

- 9月 天気は数日の周期で変わりますが、前線や湿った空気の影響を受けやすく、平年に比べて曇りや雨の日が多いでしょう。
- 10月 高気圧と低気圧が交互に通る、天気は数日の周期で変わるでしょう。
- 11月 東北太平洋側では、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

月別の平均気温・降水量



図は仙台管区气象台ウェブサイト (<http://www.jma-net.go.jp/sendai/>) より引用

大 豆

1 予報（9月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予 報 の 根 拠
紫斑病	－	並	(1) 前年の発生量は、平年より少なかった。(－) (2) 8月中旬の感染好適日数（平均気温 15～21℃で降雨があった日）は平年並。(±) (3) 9月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多い予報。(＋)
マメシクイガ	－	やや少	(1) 前年の発生量は、平年より少なかった。(－)
吸実性カメムシ類	－	並	(1) 9月の気温はほぼ平年並の予報。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【紫斑病】

- (1) 子実肥大期（開花後40日頃）までに薬剤防除を実施する。なお、マメシクイガと同時に防除する場合は、マメシクイガの防除時期に合わせる。防除適期が重ならない場合は、それぞれの適期に防除を行う。
- (2) 薬剤が莢によく付着するように散布する。
- (3) 耐性菌を生じさせないため、同一系統の薬剤は年1回の使用とする。
- (4) 適期収穫に努め、すみやかに乾燥する。

【マメシクイガ】

- (1) 有機リン剤による防除適期は、産卵盛期（県北は8月第6半旬、県央・県南は9月第1半旬）なので、直ちに薬剤防除を実施する。
- (2) 薬剤が莢によく付着するように散布する。

【吸実性カメムシ類】

- (1) 発生が見られる圃場では、有機リン剤によるマメシクイガとの同時防除を実施する。

【アブラムシ類】

- (1) ジャガイモヒゲナガアブラムシは通常の密度は低いですが、異常増殖することがあるので注意する。

りんご病害

1 予報（9月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
斑点落葉病	－	やや多	(1) 8月後半の巡回調査での発生園地率は、ふじ、王林ともに平年より高かった。(+) (2) 9月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多い予報。(+)
褐斑病	－	多	(1) 8月後半の巡回調査での発生園地率は、平年より高かった。(+) (2) 9月の降水量は、平年並か多い予報。(+)
黒星病	－	多 (平年少発生)	(1) 8月後半の巡回調査での発生園地率は、平年より高かった。(+) (2) 9月の降水量は、平年並か多い予報。(+)
すす斑病 すす点病	－	並	(1) 9月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多い予報。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(-)：少発要因、(- -)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【斑点落葉病】

- (1) 今後の降雨により発病の増加が懸念されるので、最終散布まで防除間隔が空かないようにするとともに、降雨前の防除を心がける。特に王林は秋期に多発しやすいので注意する。

【褐斑病】

「平成30年度病害虫発生予察情報注意報第2号（平成30年8月8日発表）」を参照し、以下の対策をとる。

- (1) 前年多発園（前年秋期に黄変落葉が目立った園地）で、本年、これまでに本病を対象とした特別散布を実施していない園地では、発生の有無にかかわらず、速やかにトップジンM水和剤またはベンレート水和剤を散布する。
- (2) 前年未発生園や少発生園では、9月下旬まで定期的に園地をよく観察する。黄変葉や褐色の病斑葉がまわって確認されたら、付近の葉を含めて観察する。本病であれば、病斑や病斑付近の緑色の部分に黒色虫糞状の粒々（分生子層）が必ず観察される。
- (3) 本病の発生が確認された場合は、速やかにトップジンM水和剤またはベンレート水和剤を特別散布する。

【黒星病】

- (1) 他病害との同時防除を兼ねて黒星病に効果のある予防剤を定期的に散布する。
- (2) 発病葉は、翌年の伝染源となるので、発病が確認された場合は摘み取り、土中に埋没させるか焼却するなどして処分する。
- (3) 苗木など未結果樹での発生に注意するとともに、未結果樹についても成木と同様に薬剤防除を徹底する（平成30年7月11日発行の防除速報No. 8参照）。

【すす斑病、すす点病】

- (1) 中～晩生種を対象に9月上～中旬に本病に効果のある薬剤を1～2回特別散布する。中旬以降も気温が高い場合は、さらに追加散布を行う。早生種では本病を対象とした9月の防除は不要である。
- (2) 例年、発生が多い園地では、9月中旬（最終散布）の薬剤には、ストライド顆粒水和剤、オーソサイド水和剤80、アリエッティC水和剤を選択する。
- (3) 晩生種においては、半月の平均気温が18℃を下回ると感染が少なくなるので、この時期を最終散布の目安とする。また、止め散布まで散布間隔を空けないことが重要である。

【炭疽病】

- (1) 重要な二次感染源となる発病果は、見つけたい摘み取り、園地外で処分する。

3 防除上の留意事項

- (1) 農薬を散布する際には、対象以外の品種に飛散しないように十分注意する。また、散布薬剤の選択にあたっては、農薬の収穫前日数に特に注意する。

りんご虫害

1 予報（9月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
リンゴハダニ	－	やや多	(1) 8月後半の巡回調査での発生園地率は、平年より高かった。(+) (2) 9月の気温は、ほぼ平年並の予報。(±)
ナミハダニ	－	やや多	(1) 8月後半の巡回調査での発生園地率は、平年より高かった。(+) (2) 9月の気温は、ほぼ平年並の予報。(±)
果樹カメムシ類	－	並	(1) 8月後半の巡回調査での被害果発生園地率は、平年よりやや高かった。(+) (2) クサギカメムシの予察灯への誘殺数は、平年より少なかった。(－)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【ハダニ類】

- (1) 園地をよく観察し、発生が多い園地では、速やかに防除を行う。
- (2) 特にナミハダニは、9月中旬以降、越冬成虫（オレンジ色を呈する）が出現し薬剤が効きにくくなるので、防除は、越冬成虫が出現する前までに実施する。
- (3) 目通りでの発生が少なくても、薬剤のかかりにくい樹上部で多発している場合があるので、散布ムラの原因となる混み合った部位の不要な徒長枝は、適宜剪除するとともに、樹上部まで薬液がかかるよう十分量を丁寧に散布する。
- (4) 薬剤抵抗性ハダニ類の発現回避のため、同一薬剤は1シーズン1回の使用に限る。また、薬剤は、複数年を単位としたローテーションを厳守する。
- (5) コテツフロアブルはリンゴハダニに効果がないので、リンゴハダニの発生が目立つ園地での薬剤は、気門封鎖型を選択する。

【果樹カメムシ類】

- (1) 一般に9月以降の防除は不要であるが、飛来が多数確認された場合は、効果のある薬剤により防除を実施する。

【シンクイムシ類】

- (1) 被害果は採集し、3日以上水漬け処分する。

3 防除上の注意事項

- (1) 農薬を散布する際には、対象以外の品種に飛散しないように十分注意する。また、散布薬剤の選択にあたっては、農薬の収穫前日数に特に注意する。

きゅうり

1 予報（9月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
べと病	－	並	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より低く、程度の高い圃場は見られなかった。(－) (2) 9月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多い予報。(＋)
うどんこ病	－	やや少	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや低く、程度の高い圃場は見られなかった。(－) (2) 9月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多い予報。(±)
褐斑病	－	やや多	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年並であった。(±) (2) 9月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多い予報。(＋)
炭疽病	－	やや多	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年並で、程度の高い圃場は見られなかった。(±) (2) 9月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多い予報。(＋)
黒星病	－	並	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生は見られなかった。(－) (2) 9月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多い予報。(±)
斑点細菌病	－	並	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生は見られなかった。(－) (2) 9月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多い予報。(＋)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【共通事項】

- (1) アーチの肩にある発病葉が下位葉への伝染源となるので優先的に摘葉する。
- (2) 草勢の低下は発病を助長するので、適切な肥培管理を行い、草勢の維持に努める。
- (3) 病害は、降雨が続くと発生が増加するので、降雨前後の防除に努める。
- (4) 薬剤散布は、アーチの両側から十分量を散布する。

【べと病】

- (1) 発生が見られる場合、フェスティバルC水和剤、ブリザード水和剤などの効果の高い薬剤で防除する。

【うどんこ病】

- (1) 急激な増加が見られる場合、本病に効果の高いDMI剤（トリフミン水和剤、ラリー水和剤等）やカリグリーン、ジーファイン水和剤などを交互に散布する。
- (2) うどんこ病耐病性品種であっても草勢が衰えると蔓延するので、薬剤防除を行う必要がある。

【褐斑病】

- (1) 褐斑病は、発病後急激に蔓延するので、発生を確認した場合は、発病葉を摘葉後、直ちにジマンダイセン水和剤、ゲッター水和剤などの効果の高い薬剤で防除する。

【炭疽病】

- (1) 発生を確認した場合は、発病葉を摘葉後、直ちにゲッター水和剤などの効果の高い薬剤で防除する。
- (2) 葉や茎、果実にも発病するので、発生がひどい株は抜き取り、圃場外へ持ち出し処分する。

【黒星病、斑点細菌病】

- (1) 低温多雨で発生しやすく、発病後の防除は難しいので、予防散布に努める。

【ハダニ類】

- (1) 発生が見られる圃場では速やかに防除を行う。
- (2) 特にナミハダニは9月中旬以降、越冬成虫（オレンジ色を呈する）が出現し薬剤が効きにくくなるので、防除は9月上旬までに実施する。
- (3) 薬剤散布の際は、葉裏までしっかりかかるよう十分量を散布する。

【その他】

- (1) アブラムシ類の防除は一般に不要であるが、発生が多く見られる場合は9月上旬までにウララDFなどの効果の高い薬剤で防除する。

3 防除上の留意事項

- (1) 薬剤は、耐性菌や薬剤抵抗性害虫の出現を回避するため、連用せずに系統の異なる薬剤によるローテーション散布を行う。
- (2) 薬剤の選択にあたっては、有効成分毎の総使用回数の制限に注意する。

キャベツ

1 予報（9月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量 ・ 感染量	予 報 の 根 拠
コナガ	—	並	(1) 8月中旬の巡回調査では、発生圃場率は平年並であった。(±) (2) 9月の気温は、ほぼ平年並の予報。(±)
ヨトウガ (夏眠個体)	—	並	(1) 6月に発生した越冬世代成虫の産卵圃場率は、平年より高かった。 (+) (2) 9月の気温は、ほぼ平年並の予報。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(-)：少発要因、(- -)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【共通事項】

(1) コナガ、ウワバ類、モンシロチョウ等は同時防除を実施する。

【コナガ】

(1) 定植時に薬剤処理を実施した場合でも、圃場をよく観察し、発生状況に応じて防除を実施する。

(2) 薬剤抵抗性個体の出現を回避するため、以下のことに留意する。

ア 飛来性の害虫であり、ジアミド系殺虫剤の効果が低いコナガは本県に広く発生している可能性があるため、ジアミド系殺虫剤による防除を実施したにもかかわらず、コナガの幼虫が見られる場合には、他系統の薬剤により防除を実施する。

イ 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一薬剤、同一系統の連用は避け、他系統の薬剤をローテーション使用する。また、ジアミド系殺虫剤の使用は1作型1回にとどめる。

【ヨトウガ】

(1) 若齢幼虫までの防除を徹底する。

1 予報（9月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
さび病	-	やや少	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より低かった。(－) (2) 9月の降水量は、平年並か多い予報。(±)
べと病	-	やや少	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった。(－) (2) 9月の降水量は、平年並か多い予報。(±)
黒斑病	-	並	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生圃場率はほぼ平年並であった。(±) (2) 9月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多い予報。(±)
ネギコガ	第4世代羽化早	やや多	(1) 有効積算温度から予測される第4世代の羽化始期は、平年より早い。 (2) 8月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高く、一部の圃場では発生程度が高かった。(＋) (3) 9月の気温は、ほぼ平年並の予報。(±)
ネギハモグリバエ	-	やや多	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや高かった。(＋) (2) 9月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多い予報。(±)
ネギアザミウマ	-	やや多	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高かった。(＋) (2) 9月の気温は、ほぼ平年並の予報。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(-)：少発要因、(- -)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【共通事項】

- (1) 気温が低下すると各種病害の発生が多くなるので、散布間隔が開かないように定期的な防除に努める。
- (2) 病害虫の発生・増加を確認したら、効果の高い薬剤を選択して防除を行う。
- (3) 薬剤は葉の全面に十分かかるように、畦の両側と株の上部から丁寧に散布する。
- (4) 圃場内、周辺の雑草除去に努める。

【さび病、べと病】

- (1) 多発すると防除が困難となるため予防散布に努め、発生がみられた場合には、効果の高い薬剤を散布する。

【黒斑病、葉枯病】

- (1) 抗菌範囲の広い薬剤を選択し予防散布に努め、発生がみられた場合には、効果の高い薬剤を追加散布する。

【ネギコガ】

- (1) 有効積算温度から予測した第4世代成虫の羽化始期は、県北部では9月第2半旬（平年：9月第4半旬）、県中南部では8月第4～5半旬（平年：8月5～6半旬）である。防除適期である羽化盛期は、右表の通りである。
- (2) 県中南部では今後も発生が続くので、9月下旬まで防除を実施する。また、県北部でも圃場をよく観察し、発生状況に応じて防除を実施する。

表 有効積算温度から推定したネギコガ第4世代の羽化始期と防除適期

地点	第4世代	防除適期（羽化盛期）
軽米	9-2(9-4)	9-3～9-4
盛岡	8-5(8-6)	8-6～9-1
紫波	8-5(8-6)	8-6～9-1
北上	8-4(8-6)	8-5～8-6
一関	8-4(8-5)	8-5～8-6

※月-半旬、（ ）内は平年値

【ネギハモグリバエ】

- (1) 発生が見られる圃場では、効果の高い薬剤を選択し、7～10日間隔で防除を行う。

【ネギアザミウマ】

- (1) 高温、乾燥が続くと発生が助長されるため、効果の高い薬剤を選択し、防除間隔が開かないように茎葉散布を実施する。

3 防除上の留意事項

- (1) 収穫が始まっていることから、薬剤選択にあたっては、農薬使用基準（特に収穫前日数）に注意する。
- (2) 同一系統の薬剤を連用せずに、系統の異なる薬剤によるローテーション散布を行う。

りんどう

1 予報（9月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
花腐菌核病	－	やや多	(1) 前年の発生量は晩生種で多かった。(＋) (2) 9月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多い予報。(±)
葉枯病	－	並	(1) 8月下旬の巡回調査では、一部程度が高い圃場が見られるものの、発生圃場率は平年よりやや低かった。(±) (2) 9月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多い予報。(±)
アザミウマ類	－	やや少	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より低かった。(－) (2) 9月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多い予報。(±)
ハダニ類	－	並	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年並であった。(±) (2) 9月の気温は、ほぼ平年並の予報。(±)
アブラムシ類	－	並	(1) 9月の気温は、ほぼ平年並の予報。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【花腐菌核病】

- (1) 9月は、本病を中心に防除を行い、降雨の続く場合には散布間隔を短くし予防散布に努める。
- (2) 花卉が着色し始めた品種では、10月下旬までを目処に防除を行う。
- (3) 花卉に感染するので、収穫終了後の残花は折り取り処分する。
- (4) 発病茎（特に花の部分）に菌核を形成し、翌年の伝染源になるので、発病部分を地面に落とさないように、折り取り処分する。

【葉枯病】

- (1) 翌年の伝染源密度を減らすために、これから収穫する品種だけでなく、すでに収穫が終了した品種でも、9月下旬まで薬剤防除を行う。
- (2) 多発圃場では、上位葉に進展しないよう防除を徹底する。

【褐斑病】

- (1) 発生が見られる圃場では、翌年の伝染源をなくすため、被害茎葉は取り除き、圃場外へ運び出し適宜処分する。
- (2) 株の内部の下位葉や畦の北側などから発生が見られるので、注意して観察する。

【アザミウマ類】

- (1) 花蕾の着色に伴い成虫が飛来し増殖するので、花蕾が着色しはじめた頃から防除を実施する。
- (2) 収穫が終了した品種が発生源となるので、残った花茎や不要な茎葉を折り取り、圃場外に持ち出す。折り取り処分ができない場合は、収穫前品種の薬剤防除とあわせて防除する。

【ハダニ類】

- (1) 発生の見られる圃場では、速やかに防除を行う。
- (2) ナミハダニは、9月中旬以降に越冬成虫（オレンジ色を呈する）が出現し、薬剤が効きにくくなるので、

防除は9月上旬までに実施する。

【アブラムシ類】

- (1) 栽培期間を通じて防除を実施する。
- (2) 各種ウイルス (CMV、BBWV、CYVW等) を媒介する可能性が高いため、収穫を終えた品種も薬剤防除を行うか、残った花茎を折り取り処分する。

【リンドウホソハマキ】

- (1) 発生の多い圃場では、速やかに効果のある薬剤を散布する。
- (2) 被害茎は折り取り処分する (図1、2)。



図1 茎に形成された羽化孔と茎食入部の虫糞
・ 蛹は羽化孔周辺に存在する
・ 品種によっては、髓部を食害された部分の茎が赤くなる場合が多い

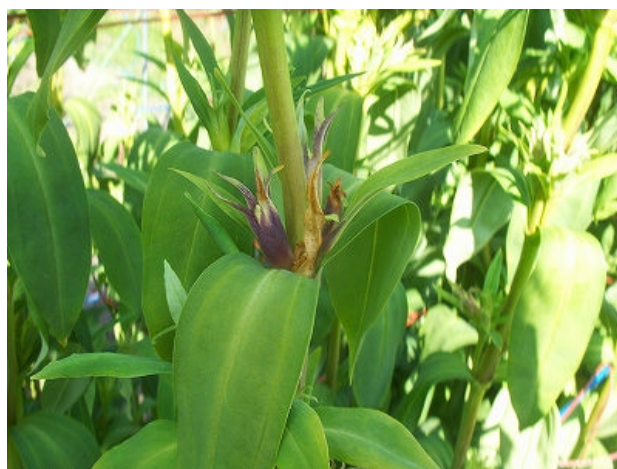


図2 花蕾被害部の着色